

小学校 第4分科会

1 単位時間の授業で複数教材を扱う道徳科の授業

～個別最適かつ協働的な学びで自己課題の解決を図る総合単元的道徳学習を通して～

高松市立中央小学校 教諭 篠原 弘樹

1 はじめに

ITの急激な発展により社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」を迎えようとしている。この予測困難な時代を生きる子どもたちには、自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探究し、納得解を得るための資質・能力が求められている。こうした資質・能力の育成に向けて道徳教育は大きな役割を果たすことができる。だが、教科化により、登場人物の心情を探るだけの授業や、1単位時間の道徳科の時間だけで終結し生活との関連性が乏しい授業（細切れ道徳）が行われるなど、指導書通りのいわば「型」通りに実践していればよいと捉える姿勢も一部に見られ、指導が固定化・形骸化していることなどが課題となっている。

このような授業を繰り返し行っても、予測困難な時代を生き抜く資質・能力の育成はできにくいと考える。さらに、個の実態が異なっているにも関わらず、全員が同じ1つの教材で考えようとしても不十分なのではないだろうか。「考え、議論する道徳」への質的転換を図るためには、これまでの「型」にはまる道徳科の授業から、答えが一つではない個々の課題を子どもたち一人ひとりが自分自身の問題として捉え向き合う道徳科の授業へと転換していく必要があると考える。

では「考え、議論する道徳」に転換するにはどのようにすべきなのか。本提案では、その改善策として「教科横断的な視点に立つ総合単元的道徳学習」での「多面的・多角的に考え議論する1主題複数教材学習」を提案したい。予測困難な時代を生き抜く子どもたちが、自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探究し、

納得解を得るための資質・能力の育成を図る道徳科の授業の実現への手掛かりにしていきたい。

2 研究の実際

① 総合単元的道徳学習を通して、個別最適かつ協働的な学びを一体化させることで自己課題の解決を図る

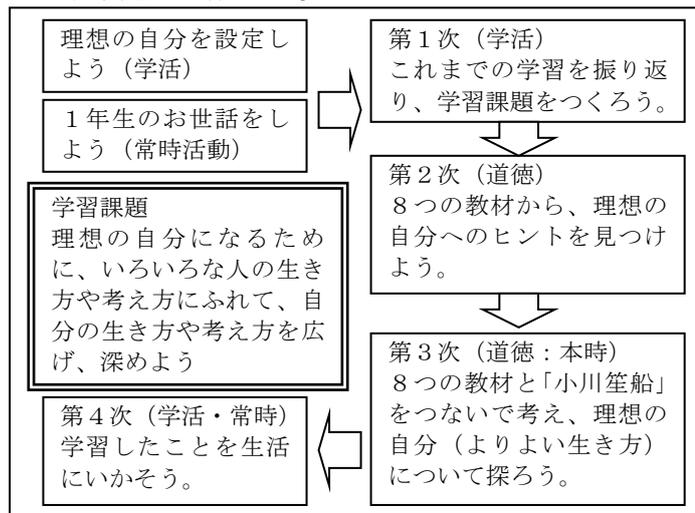
平成29年告示の学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントや教科等横断的な視点に立った学習の重要性が述べられている。道徳教育において、この視点に立った先駆的な学習の一つとして総合単元的道徳学習がある。総合単元的道徳学習においては、道徳科の学びを要として単元化を図り、価値内容について多面的・多角的に考えることで、子どもの道徳性を高めていくことができる。道徳科で学んだ価値内容と重ねて、体験活動を行ったり、体験学習で気付いたことを道徳科で深めたりする往還を通して、実体験に基づきながら「自分ごと」としてこれまでの自らの価値観を振り返り、新たな自分の価値観を作り上げていくのである。

本主題は、6年生の特別活動と関連・統合させた総合単元的道徳学習「よりよい自分をめざして」として展開した。

本学級の児童は、素直な児童が多く、毎朝自ら1年生のお世話をする児童やボランティア清掃に取り組む児童が多い。しかし、人の役に立とうとする児童が多いにもかかわらず、自己肯定感が低く、自分に自信がもてていない児童が4割程度いる。また、失敗を恐れるがあまり、自分の弱さを隠し「今の自分のままでいい。」と自分をよりよくしたいと考えることに消極的な児童も見られる。

その実態を改善するために、以下のように

本単元を構成した。



【6年「よりよい自分をめざして」 主題構成】

6年生は、年度始めに「1年生のお世話」を行っている。「1年生のお世話」では、入学してすぐの1年生との交流を通して、自己有用感を高めたり思いやりや寛容の心などを育んだりすることが期待できる。しかし、活動を続ける中で「話を聞いてくれない」「指示してもきちんと伝わらない」という悩みをもつ児童が多くいた。

一方、同時期に行った学級活動の時間には「理想の自分」を設定した。児童は「みんなを笑顔にできる自分」「頼りにされる自分」といった言葉で表現した。課題設定の理由を問うと、前述したように1年生との関わりでの課題を挙げる児童が多かった。

そこで、学級活動の時間に、似た理想をもつ児童の集まるグループ（以下、理想グループとする）を構成し、それぞれの理想を説明したり質問し合ったりする時間を設けた。話し合いでは「そもそも笑顔にするとは、どういうことか」「頼りにされるとはどういうことなのか」という更なる疑問が生まれた。そして、その疑問を解決しないと自分たちは理想の自分になれるのではないかという思いをもち「理想の自分についてより深く考えよう」と、共通のめあてを設定した。この課題を一人ひとりが解決するには、「道徳で勉強すると分かるかもしれない。」という児童の発言から、今後行う9つの教材（前時までの8教材+小川笠船）から探ろうという計画を立てた。

前時までに8つの教材を学んだ児童は、8

教材の中から理想の自分に最も影響する教材を個々に1つずつ選択した。

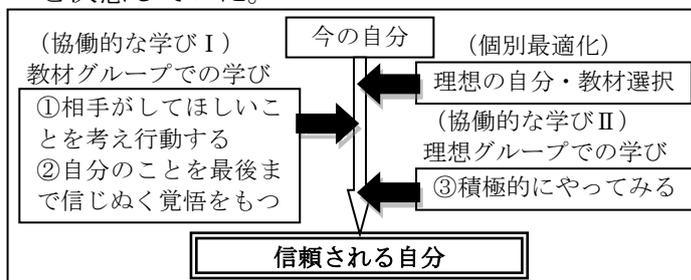
教材名	内容項目
命を見つめて	D19 生命の尊さ
幸せをいのって織るじゅうたん	C18 国際理解、国際親善
どんな心が見えてきますか	C12 規則の尊重
のりづけされた詩	A2 正直、誠実
どれい解放の父 リンカン	C13 公正、公平、社会正義
おばあちゃんの指定席	B7 親切、思いやり
市民に愛される動物園を目指して	A5 希望と勇気、努力と強い意志
ロレンゾの友達	B10 友情、信頼

【前時までに学んだ8教材の一覧】

本時は、8教材から同じ教材を選択した児童の集まるグループ（以下、教材グループとする）で話し合いを行った。児童はそれぞれの理想と解決の糸口となる教材をもちながらも（個別最適化）、共通の教材「小川笠船（D-22よりよく生きる喜び）」で話し合う（協働的な学びⅠ）ことで理想の自分を求め続けることのすばらしさや人間の気高さについて理解を深めていった。

次時には、教材グループで話したことを基に、理想グループで理想の自分について話し合った。（協働的な学びⅡ）

A児は、これまで理想としていた「頼りにされる自分」という抽象的な自分像に、教材グループでの話し合いから「①相手がしてほしいことを考え行動する」「②自分のことを最後まで信じぬく覚悟をもつ」、そして理想グループでの話し合いから「③積極的にやってみる」という具体的な目標を加えて取り組もうと決意していた。



【A児の学びの過程】

授業後、A児は1年生のお世話を続ける中で「相手がしてほしいことを考え行動する」ことを優先的に実行し、「大丈夫?」「これ、してあげるね。」と声を掛けていた。振り返り

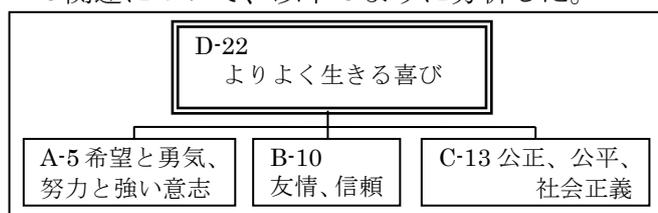
には「相手の気持ちを考えるのは難しいけれど、相手はすごく喜んでくれた。自分も、とても嬉しい気持ちになった。」と振り返った。

A 児の他にも多くの児童が、本主題での学びを体験活動に生かそうと実践したことで、成功体験へとつなげていた。1 単位時間の道徳科の授業だけでは捉えられない価値観を、総合単元的道徳学習での個別最適かつ協働的な学びを通して実感を伴って構築することができていた。

② 協働的な学びを実現する多面的・多角的に考え議論する 1 主題複数教材学習

学習指導要領解説「第 2 章道徳教育の目標 第 2 節 2 (3) 物事を多面的・多角的に考える」には、多面的・多角的に考える指導のためには、「様々な視点から物事を理解する」ことによる学習指導の工夫をしなければならないと述べられている。その例として「二項対立を取り扱う」ことが挙げられるなど、物事を多面的・多角的に考えることができるよう指導上の工夫をすることの重要性が示されている。そこで、本主題は、物事を多面的・多角的に考える工夫として、道徳的価値を複数取り扱う「1 主題複数教材学習」を行った。

本主題でねらう中心価値は、内容項目「D-22 よりよく生きる喜び」である。筆者は「D-22 よりよく生きる喜び」を、他の価値との関連について、以下のように分析した。



【 価値構造図の例 (選択した教材によって異なる) 】

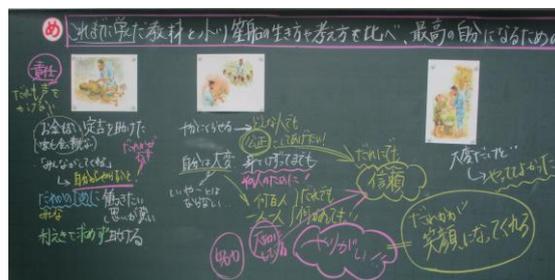
例えば、誘惑に負けたりやすきに流れたりする人間の弱さに打ち勝とうとする心 (A-5) や、人を妬んだり恨んだりすることがあってもその人を差別せず皆平等に接しようとする心 (C-13) などである。これらの道徳的価値が基底となり、崇高な人生を送りたい・よりよい生き方をしたいという心につながるのである。このことは、本時で扱う「小川笙船」も同様である。命の尊さを訴え続ける心だけでなく、動けない人を助けようとする思いや

りの心、金の有無に関わらず看病する公平な心、どんなに疲れていても医者育て患者を救おうとする不屈の心など、多様な道徳的価値が関連している。これらの価値が内在し、関連し合うからこそ、よりよい生き方・よりよい自分に喜びを感じることができる。さらに、このことは、児童の生活も同じであろう。

「だれにでも同じ態度で接したい」と理想を設定した児童は、内容項目「C-13 公正、公平、社会正義」だけを学習していてもよりよい生き方ができるとは限らない。なぜなら、個によって異なるが、「B-10 友情、信頼」や「A-5 希望と勇気、努力と強い意志」など複数の内容項目が関連し合うからである。実生活において、道徳的諸価値は複雑に関連し合うと考えるのであれば、授業の中でもあえて道徳的諸価値を関連させながら考える経験をさせるべきなのではないのだろうかと考えた。

そこで、本時の展開を、「小川笙船」を中心の教材とし、児童がそれぞれの理想の自分に合うと選択した 1 教材と関連させながら、よりよい生き方について考えるように構成した。

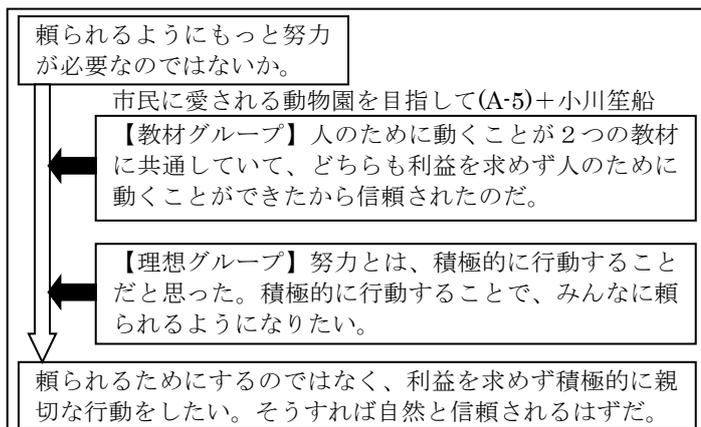
本時は、まず教材「小川笙船」について話し合った。児童は「どうして、ここまでしてみんなのために行動するのだろうか。」という発問に対し「利益を求めずに行っている。」「誰かの笑顔を見ることにやりがいを感じている。」「みんなに親切にすることで自分もうれしくなる。」「自分は大変だけど、身を削ってでも誰かのために行動したい。」といった、人間の強さや気高さに気付いていた。



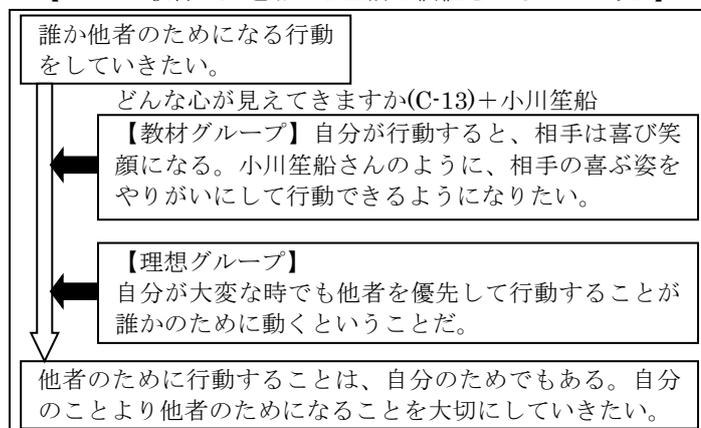
【 本時の板書 (小川笙船について議論した部分) 】

次に「小川笙船さんと、自分たちが選んだ教材の生き方や考え方を比べ、自分の理想について考えよう。」というめあてをもち、グループ活動を始めた。児童は、選択した教材で話し合ったことと小川笙船から学んだことを

比較・分類しながら話し合った。話し合いを通して児童の考えが大きく変容していった。



【2つの教材の共通点から生活と価値をつないだB児】



【2つ目の教材から新たな視点を獲得し、価値観を広げるC児】

このように、児童は理想の自分に対して1つの道徳的価値だけでなく、2つ以上の道徳的価値から探っていた。B児のように2つの教材の共通点を見出すことで道徳的価値を深める児童や、C児のように2つ目の教材から新たな視点を獲得し、価値観を広げる児童など、2つの教材を活用することで、児童の道徳的諸価値や自己の生き方に対する考えがさらに深まっていた。

さらに、①で述べた2つのグループ編成を用いることで、自分の理想像、道徳的諸価値、生活をつないだ多面的・多角的に考える話し合いが行われていた。理想とするゴールは違えど、共通の教材の中で例えながら話し合うことで、共感し合いながら考え、自己の生き方に対する考えを深めることができていた。

実生活において、道徳的諸価値は複雑に関連し合い構築されている。物事を多面的・多角的に考え議論する本時の子どもたちの思考こそが、実生活に生かされる価値観の構築に

つながると考える。

3 成果と課題

- 道徳科と特別活動を意図的に関連させる学習を行う（単元化する）ことで、体験活動からの問題を道徳科で解決し、また道徳科での学びを生かす場が保障できる。1単位時間単独の道徳科の授業よりも、より実生活に生かせる価値として児童が身に付けることができていた。
- 協働的な学びの場を「理想グループ」と「教材グループ」の2つ設けた。個によって「理想の自分」とするゴール（目標）は異なるものの、理想という共通のゴールに向かって、2つの協働的な学びの場で話し合い、多様な道徳的価値や生活をつないで考える過程自体が、「D-22よりよく生きる喜び」を考える学習となっていた。学びの個別化を図りながらも、共通項をもち協働的な学びの場で考え議論することで、自己の生き方への考えを深めることができていた。
- 本時は、8教材+1教材の計9教材を活用した。選択した教材によっては、本時の教材と関連させにくいこともあった。また、一部の児童は、自分の理想については、本主題で扱った以外の道徳的価値でも考えたいという要望があった。今後も、本主題のように単元化を図り、より深い学びへとつなげていきたい。

4 おわりに

本実践を通して、個別の課題を解決する主題構成のもと、複数のグループ編成や他教材と関連させて多面的・多角的に考える学習は、道徳的諸価値と生活をつなぎ自己の生き方への考えを深める手立てとして期待がもてると感じた。しかし、1主題だけでは、不十分な部分もあった。今後は、複数価値を用いた授業の研究を進めつつ、年間を通して児童の資質・能力が育まれるようなカリキュラム・マネジメントについても研究していきたい。